

まえがき

同期現象を、「生きた」知見として捉えて、後世に伝える営みに研究者のみならず、多くの市井の人たちが携わってきた。ステイプン・ストログッツ先生の好著「SYNC―なぜ自然はシンクロしたがるのか」(早川書房、2005年)は、その様子を臨場感をもって活写している。さらに、蔵本由紀先生による、禅マスターの偈げの如ごとき快著「新しい自然学―非線形科学の可能性」(筑摩書房、2016年)は、その源流を辿たどり、未踏の可能性に踏み込んでいる。これらの先駆者に導かれ、「シンクロ」すなわち同期の解明と、その応用は、一つの分野として確立し、さらに、研究者のコミュニティを越え、世間一般でも「市民権」を得たのではなからうか。同期を研究して痛感するのは、これが諸分野の垣根をやすやすと越え、それぞれの分野の営み・活況に至る便利な「乗り物」になり得ることである。この乗り物は、同期現象が普遍的な自然現象であることに由来して、あまたのサイエンスの小径の彼方へ、また工学、医学を経て人間社会の営みに、アクセスしている。

同期の分野・体系としての確立とポピュラリゼーションの流れを、気がつく
と30年近く、筆者は眺めてきた。その流れの先には、「予定調和」の学術
的發展と未来が待ち受けている期待感があつたように思う。しかし知らない
うちに、この分野は成熟期を越えたのだろうか。この「予定調和」よりも、
むしろ息吹のような何かを、関連周辺分野から、筆者はいま感じている。い
や、周辺新興分野が予定調和^{はず}だった筈の発展と未来に修正を促している、と
いうべきなのかもしれない。それは、この分野の大御所たちの引退による退
場と、それに代る「分野外」の若手たちによるニューウェーブな論文の登場
と時を同じくしている。そして、そのニューウェーブ達に共通するのは、視
点の新しさなのだ。それらは予定調和な価値・世界観から自由である。

ここで、浅慮のそしりを顧みず筆者の心象を記しておこう。忌憚^{きたん}なくいえ
ば、平安時代末、武士の台頭する気配の下で「今昔物語集」を編んだ僧侶
(たち)、のそれに近いのかもしれない。彼(ら)のよりどころは諸事に通じ
る「仏法」だった。これに対し、筆者(ら)のそれは、便利な乗り物である
「同期」なのだ。今昔物語は「仏法も王法も何もかも乗り越えた彼方にまで

第一話 ホタルの話

アメリカが元気だった1990年代後半の話である。1996年の秋口から、筆者は約一年間UCB（カリフォルニア大学バークレー校）に留学し、リヒテンバーグ（Allan J. Lichtenberg）教授の研究室に在籍していた。当時のアメリカは気前よく10年間で有効のビザをくれ、日本からも奨学金（学振PD）^{★2}をもらい、朝から晩まで研究三昧の日々だった。UCBには学科ごとに立派な図書館があり、いずれも蔵書が豊富で自由に閲覧できた。当時はまだインターネットでの文献検索は困難で、日課としてこれらの図書館に通っていた、そんなある日、忽然と想定外の論文が現れた。そのタイトルは“Synchronous rhythmic flashing of fireflies II,”（ホタルの同期リズム明滅・第2報）であり、*The Quarterly Review of Biology*、第63巻、3号、265—289頁、1988年に収録され、著者は（後に、昆虫学分野の大御所と知る）バック（John Buck）先生である。その内容は、ホタルが集団となってタイミングをそろえて一斉に明滅をするという現象、つまり集団同期明滅の、主に東南ア

★2 日本学術振興会特別研究員PD。当時、自由度の高い研究奨励金が支給された。

★3 実はこの論文の第一報は、1938年、つまりちょうど50年前に同一の著者により、同じ題名で同じ論文誌に出版されている。そこからは集団同期明滅を理解しようと、いろいろな説が提出されていた当時の雰囲気やうかがうことができる。このテーマについてScience誌等に出版された論文の件数は、その文献リストによると数十にもなり、いかにホットな話題であったかがわかる。

ジアでのフィールドワーク調査を網羅したものである。この論文により、すでに日本では、横須賀市自然・人文博物館の（後に、羽根田弥太先生と知る）Y. Haneda 氏が、大戦前から東南アジアのホタルの集団明滅を報じていたことを知った。^{★4}

それから数か月後、ソニーCSLに職を得た筆者は日本へ戻り、帰国後最初にしたことは博物館への電話である。ところが、諸行無常、羽根田先生はすでに鬼籍にあり、大場信義先生がホタルの研究を引き継がれているのとこのだった。電話で、筆者は大場先生に「同期現象全般に興味があり、特にホタルの集団同期明滅のコンピュータ・シミュレーションを行いたいと考えています」と説明したところ、大場先生は「私も集団同期明滅に関心があり、世界各地でこの現象を観察しています。ぜひお越しく下さい」と快諾された。そして、数日後に訪問して詳しくお話をうかがうことになったのである。

横須賀中央駅から20分程歩くと、岡の上の気のよい所に博物館がある。その時、大場先生はちょうど標本の薰蒸の最中で、建物中に薬品臭が充満していた。そんな中、いくらか臭気のマイルドな場所に移動し、お茶をいただい

★4 羽根田先生の残された文献として、ラバウル紀行

（1）、科学南洋、3、3、p.p. 191-203（1941）がある。ここに載せられた写真として、例えば、「第24図ラバウルの美女連、何れも妙齡の乙女である。」があり、羽根田先生のユーモアが垣間見える。

★5 株式会社ソニーコンピュータサイエンス研究所

ンスである。さらに、以下のように続く。

「…もし『ホタルの木』が切られたとしたら、ホタルは集まる場所を失い、個々に広いジャングルの中をさまよわねばならず、相手と出会う機会がほとんどなくなってしまい、子孫を残すことさえできなくなる。『ホタルの木』は何千年、何万年もかけて作り出された地球の奇跡なのである。」

あなかしこ。人類の存続し得る新たなライフスタイルのデザインを、ホタルは明滅を通して、囁ささやいているように感じるのは、筆者だけだろうか？　そこで一句

平家の公達、

薩摩守忠度、改め

平家の衆ただ乗り

補記 その後、筆者は大場先生と論文を共著し、年賀状のやり取りが永らく続いた。しかし、2020年に、とうとう訃報を受け取ってしまった。ホタルの「知恵」の続きは、聞き逃してしまったようだ。